

# ヴェルナー・ゾムバルトにおける 「経済システム」と発展

—『経済生活の秩序』における「文化領域」としての経済—\*

## “Economic System” and Development in the Case of Werner Sombart: Economy as “Cultural Domain” in *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*

原 田 哲 史

W. Sombart, A. Spiethoff and E. Salin, who belonged to the “youngest” generation of the German Historical School, aimed at total cognition of the national economy. Among others, Sombart proposed his own concept of “Wirtschaftssystem” in the book *Die Ordnung des Wirtschaftslebens* (1925 and 2. ed. 1927). According to this concept, each national economy consists of three elements: namely economic spirit, form (organization) and technology. In order to attain the total cognition, researchers need to understand characteristics or states of the elements and the combination of these.

Tetsushi Harada

JEL : B15

キーワード：ゾムバルト、シュビートホフ、ザリーン、歴史学派、国民経済

Key words : Werner Sombart, Arthur Spiethoff, Edgar Salin, German Historical School, national economy

\* 本論文は 2009 年 5 月 14～16 日ウィーン外交官大学 (Diplomatische Akademie Wien) にて開催された社会政策学会経済学史部会、2009 年次大会 (Verein für Socialpolitik, Dogmenhistorischer Ausschuss, Jahrestagung 2009) における筆者の報告 „Wirtschaftssystem und Entwicklung bei Werner Sombart: Wirtschaft als ‚Kulturbereich‘ in seinem Werk „Die Ordnung des Wirtschaftslebens“ を日本語に訳しかつ加筆修正したものである。日本語ヴァージョンは一度 2010 年 5 月 19 日に経済学部研究会 (関西学院大学) にて、さらに同年 12 月 11 日に第 206 回経済学史研究会 (同大学) にて報告した。その際にご教示やご意見を下さった方々にお礼申し上げます。

はじめに

- I. シュピートホフへのザリーンの影響および両者へのゾムバルトの影響
  - II. ゾムバルト『経済生活の秩序』に示された 3 層構造
  - III. ゾムバルトにおける既存の歴史把握の批判的検討
- むすび

## はじめに

歴史学派のいわば最盛期にあったグスタフ・シュモラー (1838~1917 年) と区別して、通常マックス・ヴェーバー (1864~1920 年)、ヴェルナー・ゾムバルト (1863~1941 年)、アルトゥーア・シュピートホフ (1873~1957 年) ならびにエトガー・ザリーン (1892~1974 年) は歴史学派の「最も若い youngest」世代に数え上げられる。ただし、この 4 人もそれぞれ特性を有するので、厳密な研究のためにはさらなる基準や分類が必要である。J.A. シュムペーターの『経済分析の歴史』(1954 年) では、ヴェーバーとゾムバルトが「社会学」的であったのに対してシュピートホフは「経済学」<sup>1)</sup> 的であったとされている。しかし我々は、「部分認識 Teilerkenntnis」に傾斜したヴェーバーに対して「総体認識 Gesamterkenntnis」<sup>2)</sup> を目指したゾムバルト、シュピートホフおよびザ

1) J. A. Schumpeter: *History of Economic Analysis*, Oxford 1954, S. 815-818, 東畑精一訳『経済分析の歴史』5、岩波書店、1958 年、1713-1720 頁。ただし、邦訳を参照する場合も本稿での訳語・訳文は必ずしもそれと同じではない (以下も同様)。

2) E. Salin: *Hochkapitalismus: Eine Studie über Werner Sombart, die deutsche Volkswirtschaftslehre und das Wirtschaftssystem der Gegenwart*, In: *Weltwirtschaftsarchiv*, 25. Bd. (1927 I), 1927, S. 327. Vgl. T. Harada: *Die Anschauliche Theorie als Fortsetzung der historischen Schule im George-Kreis: Edgar Salin unter dem Einfluss Edith Landmanns*, In: R. Köster, W. Plumpe, B. Schefold u. K. Schönhärl (Hrsg.): *Das Ideal des schönen Lebens und die Wirklichkeit der Weimarer Republik: Vorstellungen von Staat und Gemeinschaft im George-Kreis*, Berlin 2009, S. 195-197. なお、筆者が „gesamt“ を「総体」と訳すのは——通常そのように和訳されるように—— „ganz“ を「全体」と訳すのに対してのことである。ただし、筆者はゾムバルト、シュピートホフおよびザリーンがそうした「総体認識」に成功したと見なしてそれを前提に論ずるわけではない。そうではなくて、極めて困難なそれを探求した彼らの試みを明らかにすることによって、総合的な社会科学として経済学を模索することの意義と可能性およびその問題点を認識することを企図している。

リーンという、シュムペーターのそれとは異なった区分を提起するものである。

ヴェーバーは、「抽象的な経済理論」と同様「それ自体として矛盾なく」考えられた「理念型」<sup>3)</sup> の概念でもって、同時代や過去の現象を特徴づけることを試みた。彼は、歴史的に生成してきた様々な現象を——あたかも物差しで測るかのよう——理念型をあてがうことによって、理念型との同一性ないしそれからの偏向として理解しようと試みたのである。この場合そうした試みを複数回行うのであれば、広く相互に関連する複数の認識とともに総体認識が得られる可能性はある。ただし、理念型の方法によって得られる認識というものは、それ自体は基本的に個別認識・部分認識であり、国民経済全体の認識や、そうして認識された複数の国民経済の比較を求めるものではない。

これに対して、ゾムバルト、シュピートホフおよびザリーンは最初から総体認識を、しかも各々時間的にも空間的にも異なって発展する複数の国民経済の認識（各国民経済の総体認識、ないし複数のそれらを比較した認識）を求めたのである。

## I. シュピートホフへのザリーンの影響および両者へのゾムバルトの影響

シュピートホフは1932年に論文「歴史的理論としての一般国民経済学」で自らの「経済スタイル *Wirtschaftsstil*」構想について論じており、そこでは経済学者によって得られるべき総体認識というものを、画家によって描かれる「絵画 *Gemälde*」になぞらえている。

「経済スタイルというものは写真ではなく絵画であって、思考絵画 *Denkgemälde* を描くものであるから、やはり——画家による絵画のよう——に——不可避的・必然的に研究者という人間によって規定される [...]」。

3) M. Weber: Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis (1904), In: M. Weber: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 4. Aufl., hrsg. v. J. Winckelmann, Tübingen 1973, S. 190, 出口勇蔵訳「社会科学および社会政策の認識の「客観性」」、出口・松井秀親・中村貞二訳『ウェーバー』河出書房新社、1982年、59頁。

経済スタイルは [···] 総体現象 Gesamterscheinung を規定する本質的な事柄をすべて包摂するものなので、マックス・ヴェーバーの意味での理念型ではなく、現実の模写 Abbild der Wirklichkeit なのである。」<sup>4)</sup>

シュピートホフの「経済スタイル」構想がヴェーバーの「理念型」と異なるのはそれが認識手段ではなくそれを描くこと自体が目的だからであるが、それは機械的に——写真撮影のように——取り込まれるものではなく、様々な諸要素から本質的と思われる諸特性すべてを取捨選択していくという研究者による作業を通じて描かれるものなのである。

シュピートホフも同論文の脚注において<sup>5)</sup> ザリーンの 1927 年の論文「高度資本主義——ヴェルナー・ゾムバルト、ドイツ国民経済学、および現代の経済システムについての研究」に言及しており、上記引用での「現実の模写」という表現もザリーンに拠っている。ザリーンはそこで次のように、部分認識の「手段」としての「合理的理論」の位置づけについて述べている。

「合理的理論はたしかに「経済」を模写 abbilden しはしないが、一定の経済的現実についてのいくつかの現象を把握・説明するための不可欠な手段を提供してくれはする。そうすると、まさに明らかなのは、排他性要求や普遍妥当性要求を帯びる場合には退けられねばならなかった合理

---

4) A. Spiethoff: Die Allgemeine Volkswirtschaftslehre als geschichtliche Theorie: Die Wirtschaftsstile, In: *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reiche*, 56. Jahrgang, II. Halbbd., 1932, S. 60. 引用文中の [ ] は筆者による (以下も同様)。„Wirtschaftsstil“にあてた「経済スタイル」は訳語としてこなれているとは言えず筆者にとっても苦渋の選択である。後述のゾムバルトの „Wirtschaftssystem“概念(「経済システム」と訳した)や „Wirtschaftsordnung“概念(「経済秩序」と訳した)と区別し、かつ原語をイメージしやすくするように、しかもそれらが通常の日本語での「経済体制」概念と混同されないようにするためには、そうした訳語がよいであろうと筆者は考えた。なお、ここに引用したシュピートホフの記述においては、写真と絵画は漠然と比較されているだけであって、以下で引用するザリーンの議論のような芸術様式の区分などは見られない。原田哲史「歴史学派の遺産とその継承——ザリーンとシュピートホフの「直観的理論」」、『思想』No. 921、2001年2月、152-160頁参照。

5) Ibid., S.60.

的理論も、発見のための手段 *heuristisches Mittel* としては無害であるどころか個々の場面で最高の仕事をなしとげる、ということである。」<sup>6)</sup>  
(引用文中の強調は原文による。以下も同じ。)

新進気鋭のザリーンのシュピートホフへの影響は、シュピートホフの1932年論文の次の箇所を見ても明白である。シュピートホフは、ザリーンにおける「合理的理論」と同じ意味で「抽象的理論」や「純粋理論」について次のように言う。「抽象的理論は現実の模写としてではなく、ひとつの発見的な構成体として有効なのである。[...] 経済スタイルは現実的ないし直観的な *realisitsche oder anschauliche* 理論を有するのであり、自由で資本主義的・市場経済的な国民経済の経済スタイルにおいて純粋理論が直観的理論の道具となるように、このことは他のすべての[経済]スタイルにおいてもありうるのである。」<sup>7)</sup>

さらにザリーンのシュピートホフへの影響は、ザリーンがシュピートホフよりも先に「総体認識の理論」を探求して、しかもそれを認識手段としての「合理的」理論・純粋理論を包摂して「経済総体」を歴史的・文化的な諸要素をも含めて認識する理論であるとしていたこと、しかもその理論を「直観的理論」<sup>8)</sup>と称していたこと、これらの事実からなお一層言えるのである。

ザリーンとシュピートホフにとって経済学の主要な課題は、ひとつの国民経済総体の「現実の模写」ないし複数の国民経済総体間の諸関係の「現実の模

6) Salin: *Hochkapitalismus: Eine Studie über Werner Sombart*, S. 331-332.

7) Spiethoff: *Die Allgemeine Volkswirtschaftslehre als geschichtliche Theorie*, S. 55.

8) Salin: *Hochkapitalismus: Eine Studie über Werner Sombart*, S. 327-328. 「直観的理論」の意味について、vgl. B. Schefold: *Edgar Salin and his Concept of "Anschauliche Theorie" ("Intuitive Theory")*: During the Interwar Period, 『経済学史学会年報』第46号、2004年、原田哲史訳(ただしその“longer Version”の訳)「エトガー・ザリーンと彼の「直観的理論」の構想——戦間期において」、福島大学『商学論集』第75巻第2号、2007年。なお、「直観的理論」の生成とそのドイツと日本での展開を概観するものとして、T. Harada: *Two Developments of the Concept of Anschauliche Theorie (Concrete Theory) in Germany and Japan*, P. Koslowski (Ed.): *Methodology of the Social Sciences, Ethics, and Economics in the Newer Historical School*, Berlin, Heidelberg 1997, S. 375-394 を参照。その前半部分を敷衍しつつ邦訳したものが、上掲の原田「歴史学派の遺産とその継承」である。

写」をそうした「直観的理論」でもって行うことであり、しかもその源泉や歴史的發展を考慮に入れてそれを行うことなのである。そこで、ではゾムバルトがこの連関においてどう位置するのか、という問いが生ずる。

ゾムバルトのザリーンへの影響は、上掲のザリーン論文のタイトル「高度資本主義——ヴェルナー・ゾムバルト [...] についての研究」にすでに表れている。ザリーンによればゾムバルトは「彼の世代に要請された——その世代にまさにふさわしい——無二の経済学の仕事を探求する孤独な戦士なのであり、しかもその仕事とは、新しいドイツ的な経済学を歴史と理論、歴史主義と社会主義という結合の上に築くことであった。」ここでの「孤独な戦士」という表現から、1927 年のザリーンが自分こそゾムバルトを理解していると誇りに思っていたことが、またゾムバルトの学者としての名声を——多くの同時代の経済学者が彼を「ジャーナリズム向きだ」と軽視していた状況から——救い出そうとしていたことが分かる<sup>9)</sup>。歴史学派のいわゆる「最も若い」世代の経済学者たちは、ザリーンによれば、一方で学問のレヴェルでは「歴史と理論」を統合し、他方、社会政策・資本主義批判のレヴェルでは「歴史主義と社会主義」を統合すべきであった<sup>10)</sup>。まさにそうした試みとして、ゾムバルトの見地はザリーンによって理解されたのである。

ゾムバルト自身がこの見地を示しているのは、1902 年に出した彼の『近代資本主義』第 1 巻の「序文」においてである。そこでゾムバルトが強調するのは次の 2 点である。1. シュモラーは自分の「素晴らしい尊敬する教師」であるとはいえ、「素材の整序における建設的なもの」——ゾムバルトが「とくに理論的なもの」とする事柄——を有する自分は、シュモラーから区別されるべきである。2. マルクスは「歴史主義」に対立するものとして捉えられるべきではなく、それどころか「両方向」は「もはや敵対して凝り固まる必要はな

9) Vgl. Salin: Hochkapitalismus: Eine Studie über Werner Sombart, S. 318.

10) 1920~30 年代の「資本主義論争」におけるゾムバルトの見地については、vgl. K. Brandt: *Geschichte der deutschen Volkswirtschaftslehre*, Bd. 2, Freiburg i.Br. 1993, S. 397, 400-401.

く、より高度な一体性において調和的に結合する」<sup>11)</sup> べきである。

ザリーンはゾムバルトのこうした提言を独自の仕方でも発展させた。とりわけ1929年に出されたザリーンの『経済学史』の「新訂」第2版（初版は1923年）とその後続の諸版に見られるように、詩人シュテファン・ゲオルゲ（1868～1933年）のサークルに属していたザリーンは、第1に、自らの総合的な「直観的理論」の理論構成を、同じくゲオルゲ・サークルに属していた女性哲学者E. ラントマン（1877～1951年）の著書『認識の超越性』（1923年）での認識論を基礎に展開した。第2に、ザリーンは、近代的な工場制度における人間の尊厳を侵害する状況を、ゲオルゲとその弟子たちがつねに高く評価していた詩人J.W.v. ゲーテ（1749～1832年）における「美しい魂」の観点から批判した<sup>12)</sup>。

他方、シュビートホフに関して言うならば、我々はまだ一度、上掲の彼の1932年論文「歴史的理論としての一般国民経済学」に目を向ける必要がある。そこで彼は、自ら提唱する「経済スタイル」概念は「A. 精神 Geist（経済心性 Wirtschaftsgesinnung）」、「B. 形態 Form（規則と組織 Regelung und Organisation）」および「C. 技術 Technik（経過 Verfahren）」<sup>13)</sup> という3つのメルクマールからなる、と説明している。このことが意味するのは、各々の時間的・空間的に条件づけられる国民経済はこの3つのレベルで——またはこの3つの層をなすものとして——理解されて描かれるべきであり、そうすることによって、国民経済は自ら発展する統一体として認識され、複数のそうした国民経済の相互関係も互いにその要素にまで立ち入って比較して理解されうる、ということである。

このように言うシュビートホフは、この3層的な概念であれば国民経済の

---

11) W. Sombart: *Der moderne Kapitalismus*, Bd. 1 (=Die Genesis des Kapitalismus), Leipzig 1902, S. XXIX.

12) Vgl. Salin: *Hochkapitalismus: Eine Studie über Werner Sombart*, S. 314-316; E. Salin: *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, 2. Aufl., Berlin 1929, S. 51, 55; Harada: *Die Anschauliche Theorie als Fortsetzung der historischen Schule im George-Kreis*.

13) Spiethoff: *Die Allgemeine Volkswirtschaftslehre als geschichtliche Theorie*, S. 71-72.

全体性と発展性を体系的に理解することが可能であるとして、「経済スタイル」概念の利点を強調するのである。そして彼は、「政治的な諸機関」<sup>14)</sup>の主導的な役割を分析の中心におくシュモラーの発展過程把握に対して、それでは発展過程の全体は不十分にしか描けないと批判する。シュピートホフはシュモラーの把握を「縦割り」と否定的に特徴づける<sup>15)</sup>。シュピートホフはかつてシュモラーの助手であったし、シュモラーの死後も『シュモラー年報』の編者として歴史学派における主導的な位置を占めていたにもかかわらず、そうした批判を行っているものであり、この点は注目に値する。

このようにシュモラーを批判するシュピートホフもゾムバルトの見地へは賛意を表明している。シュピートホフは、自分の「経済スタイル」概念がゾムバルトが著書『経済生活の秩序 Die Ordnung des Wirtschaftslebens』(初版 1925 年、第 2 版 1927 年)で展開した 3 層構造の「経済システム Wirtschaftssystem」概念に由来すると言っている。シュピートホフは、このゾムバルトの概念をシュモラーの「縦割り Längsschnitten」分析とは逆の「横割り Querschnitten」分析を試みるものであるとするとともに、控え目に、自分はそのゾムバルトの概念をいくつかの点で敷衍したにすぎず、しかもその敷衍はとりわけ J. シュムペーターの提唱する「静態的および動態的な経済」<sup>16)</sup>という区別との関連で

---

14) G. Schmoller: Studien über die wirtschaftliche Politik Friedrichs des Großen und des Preußens überhaupt von 1680-1786, In: *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 8. Jg., Leipzig 1884, S. 16, 正木一夫訳『重商主義とその歴史的意義』(『社会科学ゼミナル』51) 未来社、1971 年、8-9 頁。

15) Spiethoff: Die Allgemeine Volkswirtschaftslehre als geschichtliche Theorie, S. 83.

16) Ibid., S. 78, 83, vgl. S. 71. シュピートホフとシュムペーターはボン大学で同僚だった時期があり、両者はお互いに相手を高く評価していた。例えば、シュムペーターは「事実の収集」と「理論的分析」との間に「完全に不分離で」いられるシュピートホフの見地を賞賛していた。J. Schumpeter: Gustav v. Schmoller und die Probleme von heute, In: *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 50. Jg., I. Halbbd., 1926, S. 41, 中村友太郎・島岡光一訳「歴史と理論——シュモラーと今日の諸問題」、玉野井芳郎監修『社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社、1972 年、479-480 頁。シュモラーに「横割り」思考が不足しているという批判でさえ、シュピートホフはシュムペーターのこの論文から示唆を得ている。Vgl. Ibid., S. 51, 邦訳、493 頁(ただし「横割り」はこの邦訳では「時代相の縮図」と訳されている)。



行った、と言っている。

ゾムバルトの概念である「経済生活の秩序」と「経済システム」は、それ以外にもザリーンによって『経済学史』第2版（1929年）において言及されている。その際ザリーンは、国民経済の発展の様態について芸術史の例を使って述べている。

「芸術においては、ある日突如としてロマネスク様式時代が終わってゴシック様式時代が始まるというようなことはまずないのであり、それと同じく経済も、ひとつの経済形態が突如として完璧に解体して別の形態にとって代わられるようなことはまずない。我々がゾムバルトの議論によって経済システムと名付けている、特定の統一体である経済生活の秩序というものは、ひとつの歴史的建造物であるから、つねに歴史的な生成と経過がともなうものである。とはいえ、我々が理解するように、[経済]秩序というものは唯一の経済精神と唯一の経済スタイルとが[つねに]存続することによって特徴づけられるのではなく、ある特定の精神とスタイルが[そのつど]優位を占めることによって特徴づけられるものなのである。」<sup>17)</sup>

この叙述は少し難解であるが、「ある特定の精神とスタイルが優位を占める」という点に着目して理解すべきであろう。留意すべきは、それぞれの時間と空間に応じて「特定の精神」と、この精神によって刻印された「特定の」社会的な「スタイル」とが優位を占めるということである。ひとつの特定の「経済システム」すなわちひとつの「特定の統一体である経済生活の秩序」は、そこにおいて「特定の精神とスタイル」が——最初は徐々にではあるとしても——明らかに変化しきったときに、ある別の経済システムへと移行する。「唯一の経済精神と唯一の経済スタイル」が永続するようなことは通常ありえない例外的なケースである、とザリーンは言うのである。文人ゲオルゲのサークルにいたザリーンは、ゾムバルトによる経済システムの構想が建築芸術になぞらえた特定

17) E. Salin: *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, 2. Aufl., Berlin 1929, S. 15, 高島善哉訳『国民経済学史』有斐閣、1935年、37頁。

の精神・スタイルの優位とその転変の構想として捉えうることに興味をもち、それを受け入れたのである<sup>18)</sup>。

## II. ゾムバルト『経済生活の秩序』に示された 3 層構造

さて、シュピートホフとザリーンに影響を与えたものとしてすでに触れてきた『経済生活の秩序』というゾムバルトの小ぶりの著書は、「彼の主著の極めて濃縮した要約」<sup>19)</sup>であるとしてもその単なる縮約版ではない。そこで扱われている中心問題は、「経済生活」を 3 層構造の「経済システム」として精査して描くことであり、さらにはヴァリエーションとしての様々な経済システムを比較し叙述することである。ゾムバルトはその「序文」において、3 層的な構想について次のように述べている。

「経済の領域の内部において、我々は次の構成諸要素を区別することができる。

1. 経済心性または主観的精神。すなわち、経済活動を行う人間を規定する目標設定、動因および行為規則の総体。
2. [...] しかし多数の人間のあいだでひとつの理性的な行為が生ずるや否や、その行為の基礎にある（主観的な）計画は、それによつてのみその計画が多数の人々にとって方向性を示すような客観化を必要とする。我々は客観化された計画を秩序と呼ぶ。したがって被秩序性 *Geordnetheit* というものが、経済の包摂する第 2 の構成要素である。我々はそれをいわば経済生活の形態 *Form* と名づけることができる。

18) ここでザリーンの「経済スタイル」概念は建築史における「スタイル」（「ロマネスク」、「ゴシック」などの様式）になぞらえられているが、「スタイル *Stil*」の変遷を「芸術学」のそれになぞらえる発想はすでに W. Sombart: *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*, Berlin 1925, S. 5（およびその第 2 版、1927 年の同頁）に見られる。この比喩が 1923 年のザリーン『経済学史』初版の対応箇所（S. 5）にはなく第 2 版（1929 年）で加筆されていることからして、この点でもザリーンはゾムバルトの影響を受けていると言えよう。

19) H. Peukert: Werner Sombart - ein werkbiographischer Überblick, In: A. Ebner, H. Peukert (Hrsg.): Werner Sombart: *Nationalökonomie als Kapitalismustheorie: Ausgewählte Schriften*, Marburg 2002, S. 28.

3. 経済という物財調達の問題であるところでは、人間は外的自然の物を自分の欲求にしたがって成形する手段を用いなければならない。この手段ないしこの手法を我々は技術 Technik と呼ぶ。それはいわば経済的な過程の素材 Stoff である。」(S. 1)<sup>20)</sup>

ここでは最上位に「経済心性」や「主観的精神」といった精神的・文化的概念が位置する。この表現はゾムバルトが『経済生活の秩序』第2版(1927年)で記したものであり、その初版(1925年)ではその位置に、同じくそうした概念である「有意義性 Sinnhaftigkeit」と「魂 Seele」<sup>21)</sup>とが当てられていた。ゾムバルトは「経済は文化領域 Kulturbereich である」と言って、空間的・時間的にそれ自体も変化する精神的・文化的要素が経済システムの構造において重要な位置を占めるとしている。彼によれば、「経済システムをより厳密に規定し」ていくなれば、「特定の経済心性によって支配され」ている「精神的な統一体として捉えられた経済様態」(S. 2, 14)こそが経済システムであるという結論に帰着するのである。

さて、ゾムバルトは3要素のそれぞれをさらに下位概念に分けている。

1. 「経済心性」「主観精神」についてのテーゼは敷衍されているのであり、彼はまず、経済的な行為は財を求める人間の行為によって成立するがその行為の現れ方は様々である、ということを確認する。彼によれば、そうした行為は3つの基準によって分類できる。第1に、その行為が「欲求充足原理 Bedarfsdeckungsprinzip」によるのか「営利・利潤原理 Erwerbs- oder Gewinnprinzip」によるのかという基準であり、第2に、行為の「手段選択」が「伝統主義的」であるか「合理主義的」であるかという基準であり、第3に、行為が「個人主義的」か「連帯主義的」(S. 15-16, vgl. auch S. 20)かという基準である。その際、ゾムバルトが「伝統主義的」行為との関連を指摘している点がとくに、文化的相違を経

---

20) Sombart: *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*, 2. Aufl., Berlin 1927(Reprint, Berlin, Heidelberg 2007), S.1 をこのように表記する(以下も、同書については同じ)。これについては、途中までの邦訳として向井利昌・吉筋知之訳『経済生活の秩序』(I)~(III)(神戸学院大学『経済学論集』第16巻第3号、1984年;第16巻第4号、1985年;第17号第1号、1985年)がある。

21) Sombart: *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*, 1. Aufl., Berlin 1925, S. 1.

済研究に包摂するにあたり重要となる（下記の「むすび」参照）。

2. 「被秩序性」、「形態」または——彼自身がそれを言い換えている——「組織」(S. 16) の下位分類については、ゾムバルトは 6 つの基準を提起している。第 1 に経済行為が「拘束的 gebunden」であるか「自由」であるか、第 2 に経済の秩序が「私経済的」であるか「共同経済的」であるか、第 3 に経済生活が「貴族主義的」であるか「民主主義的」であるか、第 4 に「経済活動をする多数の人間の経済生活」が「閉鎖的」であるか「開放的」であるか、第 5 に経済が「欲求充足経済」（ないし「自己経済」）か「交換流通経済」か（上掲の経済心性の第 1 の基準に対応）、第 6 に経営組織が「個別的経営」（「個人営業」）か「社会的経営」かである。ゾムバルトは、これら 6 つの基準のうちの第 5 の基準は「欲求充足経済」が専門職化されうるか否かというさらなる下位基準を有していると言う。彼は、専門職化されえないそれを「粗野な自己経済」、専門職化されうるそれを「拡張された自己経済」と見なし、後者に「社会主義経済」(S. 16-18, 20) を含み入れている。

3. 「物財調達」の「技術」に関して、ゾムバルトは 3 つの分類基準を提起している。第 1 に、ある経済システムにおいて支配的な特定の技術が「経験に基づいているのか、学術的認識に基づいているのか」、第 2 にそれが「固定的」か「革命的」か、第 3 にそれが「有機的」である——「生きた有機体（植物、動物、人間）の目的および自然の有機体の成長過程の目的に貢献する」——のか、それとも「非有機的」である——「人造的または無機的に遂行されている」(S. 19, 20)——のか、である。ちなみに、ゾムバルトらが示した技術の分類についてさらに言うならば、今日の経済システムにおいて石油依存の技術、原子力の技術、太陽光の技術のうちどれが支配的であるかという問題としてそれを適用することもできるのである<sup>22)</sup>。

以上のような諸分類をふまえて、ゾムバルトはちなみに資本主義一般が次の

---

22) 「経済システム」論（ゾムバルト）と「経済スタイル」論（シュビートホフ）の今日のエネルギー問題への応用については、vgl. K. M. Meyer-Abich, B. Schefold: *Die Grenzen der Atomwirtschaft: Mit einer Einleitung von Carl Friedrich v. Weizsäcker*, München 1986, S. 130-145.

ような諸特性を有するものであるとする。すなわち、資本主義とは、1. 精神のレベルでは営利原理・合理主義・個人主義によって特徴づけられ、2. 組織のレベルでは自由・私経済・貴族性・開放性・流通経済・「一義的には規定できない」「経営形態」（すなわち「個別的経営」と「社会的経営」の併存）によって特徴づけられ、3. 技術のレベルでは「学術的で革命的で非有機的な」（S. 27-30）性格によって特徴づけられるものである。

ゾムバルトによれば、あらゆる個々の国民経済を独自の総体として把握するためには、それぞれの精神・組織・技術という3層をそれ自体として、またそれらの相互作用も含めて研究する必要がある。第1の層（精神）と第2の層（組織）との結合に関して彼が言うには、国民経済の経済的行為を規定するあらゆる原則・規範を総体として「経済秩序」と見なすとすれば、それは「法秩序 Rechtsordnung」、「因習秩序 Konventionalordnung」、「慣習秩序 Sittenordnung」<sup>23)</sup> という3つの構成部分からなるのであるが、そうした秩序のなかには一定の「精神」が存在する。彼は言う。「一定の経済秩序においては明らかに一定の「精神」が支配的となっているのであり、その精神は特定の原理の遵守や特定の法心性の遵守に見られるのである」と。ゾムバルトが試みたのは、「経済活動を行う人々の行為を規定するすべての諸原則・諸規範の総体」（S. 2-3）として経済秩序を理解し、これら諸原則・諸規範における宗教的・文化的「精神」の貫通している状態を捉えることの必要性である。彼の意味する経済秩序は第1層と第2層の両方を有しているとしても、そこにおいては第1層の「精神」の貫徹が重視されている。ただし、とはいえそれに続いて各国民の文化・精神について詳しく展開されているわけではなく、議論はむしろ「経済システム」のシェーマにおける複数の2項対立的な図式を総合的に構築して様々な国民経済をそれぞれどちらの性質を有しているか規定することの意義それ自体にウェイトが置かれており、それが彼の叙述の特徴である。

23) 「慣習秩序」についてゾムバルトは、「これこそが（M. ヴェーバーによれば）ある「平準の行為を、すなわちもっぱら習慣と無反省の模倣とによって習慣の軌道に保たれている行為を、根拠づけるものなのである」（S. 3）と述べている。ただし、そこではヴェーバーの典拠は記されていない。

〈経済システムのシェーマ〉

A. 精神（経済心性）

I. 欲求充足原理 — 営利原理

II. 伝統主義 — 合理主義

III. 連帯主義 — 個人主義

B. 形態（規則と組織）

I. 拘束性 — 自由

II. 私経済 — 共同経済

III. 民主主義 — 貴族主義

IV. 閉鎖性 — 開放性

V. 欲求充足経済 — 交換流通経済

VI. 個人経営 — 社会的経営

C. 技術（工程）

I. 経験的 — 科学的

II. 固定的 — 革命的

III. 有機的 — 非有機的（人造的 — 無機的）

W. Sombart: *Die Ordnung des Wirtschaftslebens*, 2. Aufl.,  
Berlin 1927, S. 20.

### III. ゾムバルトにおける既存の歴史把握の批判的検討

シュビートホフがゾムバルトの「横割り」シェーマはシュモラーの「縦割り」よりも優れているとしたことについてはすでに述べた（第 I 節）。それは国民経済を様々なメルクマールでもって把握することによって地理的に別の国民経済との対比が——2 項対立のどれを示しているかという観点から共通性やまた相違を認識することによって——厳密・明確に行いうるという利点を有するのであり、また各々の国民経済においてそれぞれの要素が歴史的にどのように移り変わっているかを知ることによって要素ごとに異なった発展を行っている構成体として国民経済を捉え、そのようなものとしての複数の国民経済

相互の比較も複眼的・構造的に行いするのである。ゾムバルトは言う。「経済の〔純粹理論的な〕理念は没空間的・没時間的な理性概念である。しかしながら、経済生活の意味における「経済」とは、空間と時間によって拘束された事実複合体 *Tatsachenkomplex* なのである。あらゆる文化、したがったまたあらゆる経済は——それが現実のものであるならば——歴史なのである。」「我々によって区分された3つの秩序原理が効力を発揮していく歴史的な順序」(S. 4-5)を明らかにすべきだと彼は言うのである。このような議論のなかで我々はゾムバルトによる歴史学派の遺産の継承を見ることができる。彼の「経済システム」論は、歴史学派ならびにその同時代の学者による、国民経済と発展に関する様々な学説を批判的かつ総合的に継承することによって構想されている。我々は諸学説のゾムバルトによる批判的継承を確認しておきたい。

「これまでの体系化の試み」と題された彼の『経済生活の秩序』第1章第1節において、彼はまず A. ヴァーグナー (1835～1917年)、G. シュモラー、E.v. フィリポヴィッチ (1858～1917年) による「国民経済 *Volkswirtschaft*」(単に「経済」を意味することも多いが „Volk-“からすれば「国民経済」)の定義を精査する。彼によれば、国民経済は、

- ヴァーグナーの場合、「個々の経済の間での、分業と財譲渡(流通)に基づくひとつの「全体」、ないしひとつの関連する(?)システム」(S. 6)<sup>24)</sup>と定義され、
- シュモラーの場合、「ひとつの現実の全体 *Ganzes*、ないしひとつの結合された総体 *Gesamtheit*、しかも、そのなかで諸部分が生きた相互作用にあり、全体が全体自体として明白な諸作用を有しているそれ。ひとつの総体、しかも諸部分において永続的な転換がありながら、その本質において、その個々の基本的諸特性において何年も何十年も同じ総体であり

24) 引用文中における丸括弧での疑問符 „(?)“ はゾムバルトによる追記であり、イタリック箇所は(ヴァーグナーの原文では隔字体だがゾムバルトによって無視されているので)筆者(原田)がヴァーグナーのオリジナルにより補足した。A. Wagner: *Lehr- und Handbuch der politischen Oekonomie*, 1. Halbbd. (= Grundlegung der politischen Oekonomie), 1. Theil, 1. Halbbd., 3. Aufl., Leipzig 1892, S. 259.

続けるそれ」(S. 6)<sup>25)</sup>と定義され、また  
— フィリポヴィッチの場合、「時間的にも空間的にも持続するひとつの経済諸  
単位の結合体 Verbindung、[しかも] それゆえひとつの全国民 ein ganzes  
Volk の [...] 組織 Organisation としてではなく、有機体 Organismus  
として特徴づけられるそれであり、しかもその国民が国家によって組織  
されていて、伝統・歴史・文化発展によって統一の意識をもっている場  
合のそれ」(S. 6-7)<sup>26)</sup>と定義されている。

これらの定義の批判的な考察を経たうえでゾムバルトは、次のように結論づける。これらの学者たちは「国民経済の理念 [...] が実際のところ疑いなく経済学的考察にとって極めて有益であり、やはり不可欠である」と考え、彼らすべてにとって「国民経済の理念」は「ひとつの国民全体における複数の個別経済の社会的な結合体」の表象」を意味している。けれども、彼らの結論は国民全体の複数の個別経済の社会的な結合体をより一層研究していくには充分ではない。というのも、そもそも「こうした結合体がどのような性質のものなのか」(S. 7) が明らかにされないままだからである、とゾムバルトは言うのである。そこで彼は、これらの定義をベースにしつつ、それらを構成している諸要素に厳密な定義を施し、そうした諸要素を整理してより体系的に把握していこうとする。このゾムバルトの企図は、例えばフィリポヴィッチによって言及された文化的な要素が自らの「経済生活」の定義における第 1 の要素として——「精神」と「魂」の意義を強調しつつ——包摂されていることにおいても見られる。

ゾムバルトによる「経済生活」構想の定義は、とりわけ「手工業的な、資本主義的な、または社会主義的なベース」(S. 7) をそれぞれもつ「一定の経済生活の歴史的な特殊性」を記述することを意図しており、そのため彼はさらに、これまでのいくつかの発展論を「生産の状態」に、または「販路の長さ」に重

---

25) G. Schmoller: *Grundriß der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre*, 1. Teil, Leipzig 1900, S. 5.

26) [ ] は筆者(原田)による補足。なお、筆者はフィリポヴィッチの典拠を確認することができなかった。



きを置くという2つタイプに分類したうえで、批判的に分析していく。

第1のタイプとして、主にG. シェーンベルク(1839～1908年)の発展論が考察される。シェーンベルクは著書『政治経済学ハンドブック』(第3版、1890年)において6段階ないし(最初の2段階をまとめれば)5段階の発展論を展開しており、それは(1)「狩猟国民」、(2)「漁労国民」、(3)「牧人・遊牧国民」、(4)「定住の純粹耕作国民」、(5)「営業・商業国民」、(6)「産業国民」へと段階づけられている。シェーンベルクによる段階区分の基準は、時間的・空間的に特定された「国民 Volk」(ないし単に「民」)の「主要生産部門」がどうであるかである。シェーンベルクは、国民の「生産の状態」を表す主要生産部門を、投入される「財製造の[...]」3つの生産要素すなわち労働・自然・資本(S. 9-11)<sup>27)</sup>のどれが一番重みをもっているかによって特徴づける。例えば「狩猟国民」と「漁労国民」という第1と第2の段階では、自然が最重要の生産要素である。それに対して、「産業国民」の第6段階では主要生産部門は「機械による生産」(S. 9, 11)<sup>28)</sup>すなわち「産業」なので、資本が最重要なのである。

ゾムバルトはシェーンベルクの議論を、アリストテレスからアダム・スミスとフリードリヒ・リストを経てきた生産着目型の発展論の系譜のなかで「完全な彫琢」にまで至っているとして賞賛する(vgl. S. 9)。さらに、生産着目型のみならず、これまでのすべての発展論のなかでも、シェーンベルクのそれは「経済の様々な特徴についてこれまで言われてきた事柄の最良のものを含んでいる」(S. 11)として極めて高く評価している。この評価には我々も、シェーンベルクがその叙述において数多くの様々な——しかも自ら変化を遂げていく——経済的な組織についてそれぞれの生産技術に着目しながら反論の余地がないかのように説明していることから、うなづくことができる。そこには、例えば「定住の純粹耕作国民」における「農村住民と都市住民」の間での分業関係の生成といった社会的分業レベルの分析とともに、「産業国民」での大

27) G. Schönberg (Hrsg.): *Handbuch der politischen Oekonomie*, Bd. 1 (= *Volkswirtschaftslehre*, in zwei Bänden), 3. Aufl., Bd. 1, 1890, S. 30-43, insbes. S. 30.

28) *Ibid.*, S. 29-30, 32, 42-43.

企業における賃労働者にとっての「大きな危険」の生成といった作業場内分業に関連する問題についての叙述もふんだんに盛り込まれている<sup>29)</sup>。

しかしながら他方ゾムバルトは、上述の彼の経済システム構想の第 1 の基準からして、すなわち「精神」に着目する見地からシェーンベルクを批判する。ゾムバルトによれば、シェーンベルクの議論においては「組織」関連の諸事実と「技術」関連の諸事実ならびに両者の諸関係が巧みに描かれてはいるものの「シェーンベルクによって数えあげられた、それぞれの経済生活の本質的諸特性なるものは [...] どのような精神的紐帯も捨棄して無媒介に並べられており、この様々な諸特性を理念において一体化するもの——これこそ総体像へとそれらをつなげるものであるが——は欠けているのである。この欠陥はやはり、システム形成の理念 Idee が不在による」(S. 11) と。

第 2 の「販路の長さ」タイプとしてゾムバルトが論ずるのは、K. ビューヒャー (1847~1930 年) の段階論、すなわちその著書『国民経済の生成』(初版、1893 年)におけるそれである。ビューヒャーの関心は「すべての発展」を「ひとつの観点で捉える」ことであり、それは「生産物が消費者にまで至る販路の長さ」という「唯一の観点」(S. 12)<sup>30)</sup>である。ゾムバルトはこの議論に対して皮肉たっぷりに「今なお広い範囲で——というのも歴史家たちがそのようなことから——名声をもてあそんでいる」(S. 12) と言いつつ、ビューヒャーをシェーンベルクよりも厳しく批判する。

自著『近代資本主義』ですでにビューヒャーを批判しているゾムバルトは<sup>31)</sup>、ここでも「販路の長さというこのメルクマールは、経済生活の総体としての状態を特徴づけるにはまったく役に立たず」、それよりも「どちらかといえば副次的な事実」に関連するものである、と反論する。それどころか、ある商品については過去と現在の販路距離が——時代的な相違にも関わらず——さして変わっておらず、それは例えば「中世都市の布地生産者の布地」と今日(ゾム

---

29) Vgl. Ibid., S. 9-12, 43.

30) K. Bücher: *Die Entstehung der Volkswirtschaft: Sechs Vorträge*, 1. Aufl., Tübingen 1893, S. 14-15.

31) Vgl. W. Sombart: *Der moderne Kapitalismus*, Bd. 1, 1. Aufl., Leipzig 1902, S. 53-54.

バルトの時代の)の「工場」(S. 12-13)による布地とがほとんど同じ距離の販路をもっていることから言える。したがって、ビューヒャーの説は「シェーンベルクの説よりも役に立たない」(S. 14)とゾムバルトは言う。

ビューヒャーと同様 B. ヒルデブラント (1812~78 年)も、一面性を帯びた例としてゾムバルトによって批判される。ヒルデブラントは論文「自然経済、貨幣経済および信用経済」(1864 年)において、国民経済は低い「自然」経済の段階からより高い「貨幣」経済の段階を経て最高の「信用」経済の段階へと 3 段階的に発展するのであり、それぞれ支配的な「支払い手段」が各段階を規定している、と述べた。支払い手段は最初「土地」(および「労働者」)においては「奉仕」であり、次に「金と銀」という金属貨幣、そして最終的に銀行・信用金庫等を媒介とする「信用」ないし「紙幣流通」「手形流通」となる<sup>32)</sup>。ゾムバルトは、このもつぱら支払い手段の転変に依拠するヒルデブラントの構想は「表面的な諸事象のみを持ち上げる」という問題を有しており、さらには「貨幣経済」と「信用経済」が実際には「まったく区別できない」ものであることからすれば「それどころか正しくない」と言う。さらに、ヒルデブラントによって「自然経済と貨幣経済」が対立的に示されているが、これはむしろ「自己経済と交換流通経済」(S. 14)<sup>33)</sup>の区別として捉えるべきである、と主張す

32) B. Hildebrand: *Naturalwirtschaft, Geldwirtschaft und Creditwirtschaft*, In: *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 2, 1864, S. 4, 9, 11, 12, 19-20, 橋本昭一訳『実物経済、貨幣経済および信用経済』(『社会科学ゼミナール』57) 未来社、1972 年、16, 25, 29, 30, 40-42 頁。なお、訳書では „Naturalwirtschaft“ が「実物経済」と訳されているが、筆者は「自然経済」と訳した。 „Natural-“ を「実物」とした方が「現物」(での支払い)というニュアンスが表されるという利点はあるとはいえ、ヒルデブラントがその名詞形 „Natur“ を「自然的必然性 *Naturnothwendigkeit*」(S. 9) や「自然の奴隷 *Sklave der Natur*」(S. 11) という具合に使っているなかで、それらの意味上の——彼自身が含意させたと思われる——親近性を示すには „Natur-“ に「自然」をあてた方がよいと思われるからである。その他、信用経済を頂点とするミュラーとヒルデブラントの発展段階論の意義については、原田哲史「交換手段の転変を基軸とした発展段階論——ミュラーとヒルデブラントにおける歴史把握の方法」、八木紀一郎・真継隆編『社会経済学の視野と方法——日本とドイツ』ミネルヴァ書房、1996 年を参照。

33) ゾムバルト自身このように書いているとしても——厳密に言うならば彼の「粗野な自己経済」と「拡張された自己経済」という上記の低位カテゴリー分類に照らして——「粗野な自己経済と交換流通経済」と言われるべきであろう。

るのである。

## むすび

ゾムバルトは最初から、自らの「経済システム」概念でもって国民経済の総体認識を得ようとしたのであって、そうした関心からして経済システムの概念は複数の——とりわけ彼の場合には 3 つの——構成要素から成るものでなければならなかった。ただし、3 つの構成要素が分けられる際のそれぞれの 2 項の区別は帰納法によって導出されたというよりもむしろ論理的になされた（例えば「欲求充足原理」と「営利・利潤原理」という）原理的な区分であるから、ゾムバルトの構想は、ヴェーバー的な「理念型」を複数合わせたものに近いと言えないだろうか。ヴェーバーが論理的に矛盾しない構造関係を「理念型」としたのに対して、ゾムバルトは論理的に矛盾する構造関係を 2 項区分として表現したという違いがあるが、いずれも論理的かつ原理的な想定・分類が先にあるのであって、それでもって現実が裁断・整理される。しかも、これまで見たゾムバルトの叙述にはザリーンのような美学的な観点からの——価値判断を交えての——資本主義批判も見られない。したがって、ゾムバルトは最初から総体認識を目指し、かつ「禁欲」ではなく「贅沢」から資本主義が生まれたと『恋愛と贅沢と資本主義』（1922 年）で主張した限りでヴェーバーとは異なるが、論理的モデル認識と没価値判断という点ではヴェーバーに近いのである。

ちなみに、歴史的な思想を直接現在と結びつけることはできないとはいえ、ゾムバルトからザリーンとシュピートホフへと至るそうした見地と、今日の新たな制度経済学の観点との簡単な比較をしてみたい。両者は似てはいるが、相違している。というのも、どちらも経済社会の非数学的・文化的・制度的な諸側面の理解にウェイトを置くという共通点があるのであるが、新たな制度経済学では多くの場合、取引費用の分析が優先されてそこから文化的・精神的な諸要素が考察されるのであって、そうした諸要素に初めから中心的な役割が与えられるわけではない<sup>34)</sup>。したがって、今日の新たな制度経済学よりもゾムバ

34) Vgl. M. Gottschalk, S. Broyer (vom Herausgeber überarbeitet): Einleitung, In: B.

ルトの構想の方が、文化的に異なる個々の国民経済の総体の把握と複数のそれ相互の比較には向いているのではないか。例えば、今日のグローバル化において（にもかかわらず）日本の「小集団」指向とドイツの「オープンな討論」指向という経済文化的な相違が両者にあることを考察する際などは<sup>35)</sup>、数量によるよりも社会集団形成の伝統的・精神的な相違をまず明らかにする必要があるであろう（そこでは慣習・伝統を使いつつ数量的な極大化が「合理的」に追求されてもいるのであるが）。

---

Schefold (Hrsg.): *Wirtschaftssysteme im historischen Vergleich*, Stuttgart 2004, S. 56-62. 歴史学派の視角から新たな制度経済学を分析する示唆的な研究として、vgl. B.P. Priddat: *Moderne geschichtliche Methode*: D.C. North, In: J.G. Backhaus (Hrsg.): *Historische Schulen*, Münster 2005. この研究書については、筆者（原田）による書評 In: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 93, Heft 3, 2007, S. 383-384 を参照してほしい。なお、新たな制度経済学とは異なり古い制度学派の場合は取引費用の分析が重きを占めず、ゾムバルトらとの距離はさほど大きくない。もともと、新たな制度経済学においても様々な見地が展開されていることに配慮する必要がある。磯谷明徳「旧制度派経済学」、進化経済学会編『進化経済学ハンドブック』共立出版、2006年、148-155頁参照。

- 35) トヨタの「トップ・マネジメント」は長くトヨタに勤めてきた人々と創業者一族とから成るのであるが、「フォルクス・ワーゲン」のそれは多種多様な代表者たちから——狭義での経営者たちのみならず政府・IGメタル・関連会社（ポッシュなど）の代表者たちからも——成る。風間信隆『ドイツの生産モデルとフレキシビリティ——ドイツ自動車産業の生産合理化』中央経済社、1997年、217-248頁参照。また海道ノブチカ「「企業と社会」とコーポレート・ガバナンス」、海道・風間信隆編『コーポレート・ガバナンスと経営学——グローバル化下の変化と多様性』ミネルヴァ書房、2009年、5-8頁参照。